

部活動体験による青年期不適應について —事例検討—

高田知恵子,* 田村 宏,** 石淵真理子,** 藤永 隆,**
下山定利,** 柚木 仁,** 黒梅恭芳,** 丹野義彦*

*群馬大学医療技術短期大学部

**群馬大学医学部小児科学教室

(1987年9月29日 受理)

Adolescent Maladjustment Due to School Club Activities —Case Study—

Chieko TAKATA,* Hiroshi TAMURA,** Mariko ISHIBUCHI,**
Takashi FUJINAGA,** Sadatoshi SIMOYAMA,** Hitoshi YUNOKI,**
Takayoshi KUROUME** and Yoshihiko TANNO*

*College of Medical Care and Technology, Gunma University,

**Department of Pediatrics, Gunma University

School of Medicine, Maebashi, Gunma 371 Japan

Key Words : Adolescent Maladjustment, School Club Activities, Aristocratic Group Atmosphere

序 文

中学時代の部活動が青年期の精神衛生に与える影響に就いて、筆者らは検討して来たが、^{1),2),3)}学校不適應の一つの要因として「部活動」の存在が重大である事を指摘した。

前回我々は、大学生への遡行的調査を行い、①部活動が現代の青年にどのように認知されているのか、②自尊感情の高低と、部活動への認知との関連があるのかを調べた。その結果、中学校の部活動体験が人格形成に何らかの影響を及ぼしている可能性がある事を報告した。^{2),3)}即ち、部活動体験、就中、集団の専制的雰囲気、大学生の自尊感情に否定的な影響を与えている事が示唆された。

今回はそれに引き続き、部活動体験と人格形成の関連を更に検討するべく、臨床場面で

の事例に就いて報告する。部活動体験が青年期不適應の要因となっている事例に就いては、我々の予備的報告があるが、¹⁾今回は更に詳細に検討したい。

事 例

ここで報告するのは我々が臨床場面で接した(大学病院小児科、一般病院小児科・精神神経科)8例である。(年齢は初診時のものである。)なお心理検査の実施が可能であった事例に就いてはその結果も報告する。表1はその一覧表である。

表1 事例一覽表

事例	性	学校学年	年齢	部活動	主 訴	性格・特徴
1	女	村立中学 1年	13	新体操部	頭痛, 疲労感	優等生タイプ, 明るい, 真面目
2	男	村立中学 1年	13	バスケット部	腹痛, 登校拒否	幼稚, 外向的, 明るい, 単純
3	女	村立中学 2年	14	卓球部	抑鬱, 不眠, 登校拒否	世話好き, 明るい, 自己主張的
4	男	市立中学 1年	13	バスケット部	登校拒否, 無気力	受動的, 主体性がな い, おとなしい
5	女	県立高校 1年	16	剣道部	両手のしびれ感, 冷感, 不眠	几帳面, 責任感が強 い
6	女	市立中学 2年	14	新体操部	拒食, 痩せ, 抑鬱	頑張り屋, 内向的, 明るい, 負けず嫌い
7	男	町立中学 2年	13	卓球部	腹痛, 頭痛, 強迫症状 (頻回の排便), 不安	未熟, 小心, 依存的
8	男	町立中学 3年	14	テニス部	呼吸困難, めまい, 脱力, 四肢のしびれ	優等生タイプ, 真面 目, 依存的, 未熟

〔事例1〕女子。村立中学1年。13歳。新体操部。

主訴：頭痛、疲労感。

経過：部活動の中では比較的楽しそうだったので新体操部を選んだが、予想に反し、練習時間は多く、人間関係は上下関係がきびしく、心身共に疲れた。夏休みの練習に入ってから頭痛、疲労がひどくなった。通院の為、休もうとしても、その度に先輩に嫌味を言われるので、我慢してしまおうという気になり、受診が遅くなった。母親は心配したが、本人が頑張るので仕方なく様子を見ていた。頭痛、疲労は9月にひどかったが、受診後、改善して来た。

夏休みには父親と好きな考古学の発掘に行くのを楽しみにしていたが、私的な楽しみのために部活動を休むなどもっての他という雰囲気の中では、とても言い出せず断念してしま

った。

本人も、母親も、不調の原因は部活動だと了解し、部への不満を述べていたが、如何ともし難い状況であった。

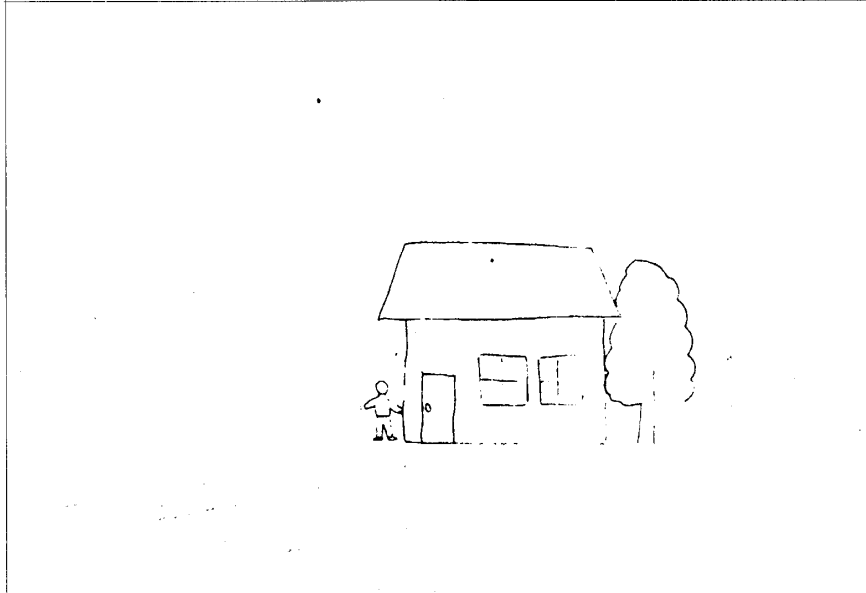
性格：優等生タイプ。几帳面。真面目。学業良好。

心理検査：優等生タイプで周囲からの期待が大きい。ロールシャッハ・テスト(以下ロ・テストと省略)やHTP描画検査(統合型HTP。以下HTPと省略、図1参照)の結果では知的側面、内面性、想像性は非常に豊かという程でもない。精一杯努力をしてそれに応じて来たのであろう。自分でも社会適応は良く、外交的でリーダー的役割を果たしていると評価している(YG性格検査：以下YGと省略)。又、生真面目で、規則を拘り定規に守ろうとする融通の無さもある(PF-Study：以下PFと省略)。SCTでは、少女らしい

空想、趣味等に混じって、身体的な不全感や「部活動の時間を短くして欲しい」「部活動は

とても苦しくていやです」という記述が見られる。

図 1



〔事例2〕男子、村立中学1年、13歳、バスケット部。

主訴：腹痛、登校拒否。

経過：もともとバスケットが好きで入部した。練習はきつかったが、1学期までは特に問題なく過ごして来た。ところが、3年生が引退した2学期から、2年がいぼり出し、本人に特に暴行を加える様になった。殴る蹴るの暴行を受けたが、母親には隠していた。3学期早々暴行を受け、翌朝、腹痛を訴え「行くと半殺しに会う」と登校を拒否した。驚いた母親が受診させ、休部した。いじめた先輩は「カツをいれただけ」と弁解している。再登校しているが、本人は部には絶対戻らないと述べ、学校でも部員と顔を合わせない様になっている。

性格：明るい、外向的、子供っぽい、単純。

心理検査：面接ではハキハキと話す。YGでもD型で、外交的、活動的で協調性もある。本来、明るく、クヨクヨしないタイプである。知的には余り高くはなく、現実認識力、判断力はやや低い。自己内省力は乏しい。対人的関心はあり、他者の目を気にしているが面と

向かって交渉できない未熟さがある(ロ・テスト)。問題が生じた時、自己非難したり、後悔する事が多く、他者に頼めず、一人で何とかしなければという気持ちが強い(PF)。SCTでは単純で幼稚な内容が多いが、その中で「気になるのは部活動のこと」「部活動で先輩にむやみにたたかれたこと」という記述が見られた。

〔事例3〕女子、村立中学2年、14歳、卓球部。

主訴：抑鬱、不眠、登校拒否。

経過：もともと運動は苦手で、部活動も熱心ではなかった。全員参加と決まっていたので仕方なく卓球部に入った。2年の6月風邪気味で部活動を休んだところ、日頃対立していた同級生グループに「部活がいやで休むんだらう」と悪口を言われ、除け者にされた。担任教師に相談したが「理解してくれず、私だけ悪者にした」。この頃より頭痛、不眠を訴えて、保健室を頻繁に訪れるようになった。本来、明るい性格なのに、この頃はひどく落込んでいた。7月になって登校を拒否し、「入院

すれば登校しなくも済む」と自ら希望して受診した。「登校拒否の友達が入院していたのを思い出し、この病院なら、先生も看護婦さんも親切だから良いと思った」との事であった。病院から学校に調整を要請し、その後、登校する様になった。

性格：快活、世話好き、自己主張するタイプ、外交的。

〔事例4〕男子、市立中学 1年、13歳、バスケット部。

主訴：登校拒否、無気力。

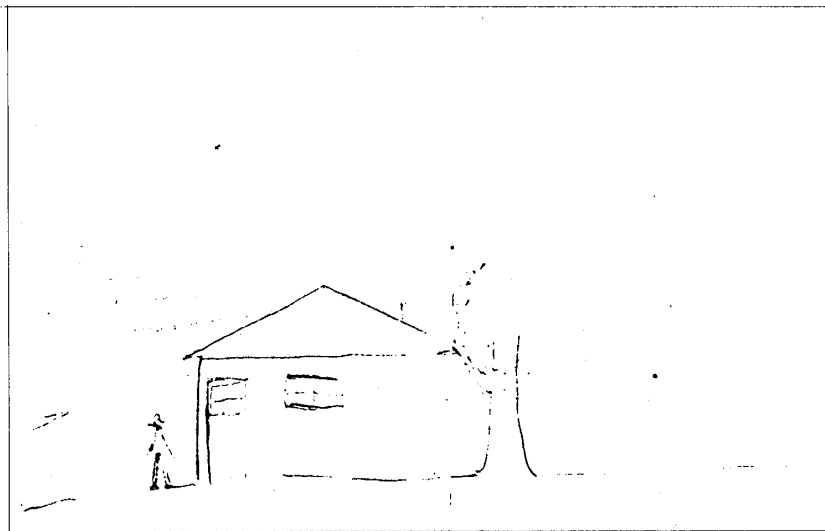
経過：本人は乗り気ではなかったが、友達に誘われて入部した。6月になって、練習のし過ぎで膝を痛め、整形外科を受診し、しばらくは休む様に言われた。本人は部活動に復帰するのは無理だと考えていた。ところが、熱心な友人が「見学だけでも」と頻りに誘いに来た。本人はそれが苦痛で断るのに苦慮していた。夏休み末の3年の送別会には発熱（自己検温）の為、欠席した。この頃より「発熱」が多くなり、2学期早々早退し以後登校を拒

否し、不規則で無気力な生活を続けていた。微熱が続くという事で、開業医を受診したが、特に異常は発見されず、紹介されて12月に大学病院に入院した。病院内の養護学校に編入したが、「熱があるので」と無気力にベッドで過ごす事が多い。

性格：おとなしい、主体性がない、受動的。

心理検査：テスト場面では生気の乏しい表情。反応は遅く、声は小さく、面倒臭そうな態度だが、拒否はない。知的には普通範囲内で（WISC-R：IQ=86）、現実吟味力もあり、一般常識も一応わきまえているが、無気力で、与えられた環境を積極的に生かす事ができない（HTP、図2参照、ロ・テスト）。受動的、内向的、不活発である（YG：C型）。対人意識過剰で、他者の目を気にしているが（ロ・テスト）、反省心は乏しく、他者からの批判に対しては攻撃的になる（PF）。簡単には自己表現をしたくないといった態度の様である。だだっ子の様な面と、諦めて無気力な面とが混在している。

図 2



〔事例5〕女子、県立高校1年、16歳、剣道部。

主訴：両手のしびれ感、冷感、不眠。

経過：厳しい部で退部を考えた事もあるが、

部員も少なく辞められず、体を壊したら、その時に退部すればよいと考えていた。10月

頃より上記症状出現。ひどくなったので、内科を受診したが、心身の緊張によるものと指摘され、精神科に紹介された。泣きながら、症状の原因を「部活の厳しさのせいだと思う」と述べる反面、「良い人ばかり。皆やっている事。大した事ではない」と突っ張っていた。休部するよう勧めても「皆に迷惑が掛かる」と容易に承知しなかったが、ようやく納得した。結局休部し、その後症状は改善した。

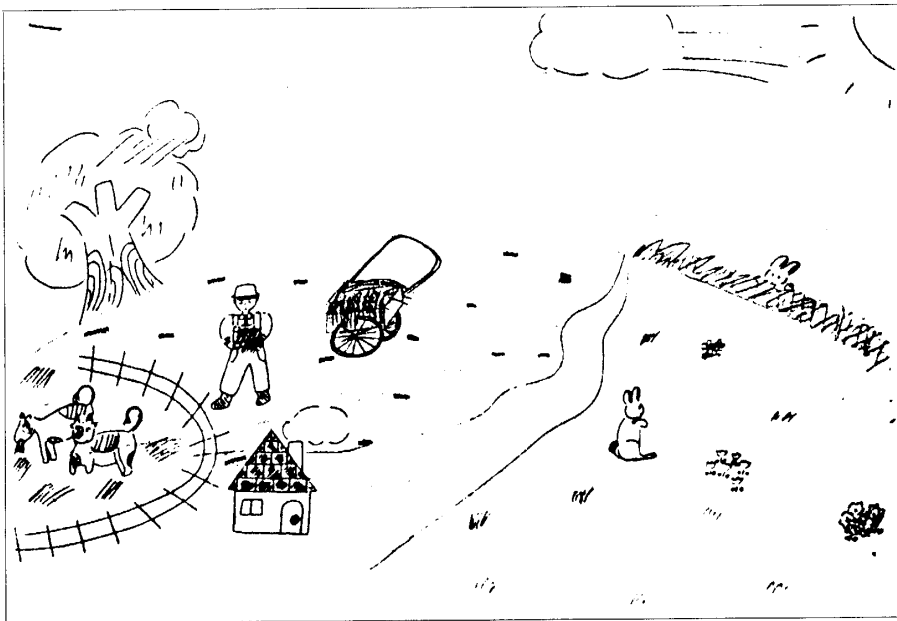
性格：几帳面。責任感が強い。

〔事例6〕女子。市立中学2年。14歳。新体操部。
主訴：拒食。痩せ。抑鬱。

経過：母親が、本人に4歳の時からバレーを習わせ始めた。土曜、日曜もなく、バレー第一の生活を送っていた。6年の時、全国コンクールがあり、その代表に選ばれるだろうと期待していたが、スタイルの良いライバルが選ばれ、非常にショックを受けた。中学入学と同時にバレーを自発的に辞め、新体操部に入り、熱心に活動していた。市大会に向けて減量を始め、大会で2位になった。更に減量して県大会に臨んだが、入賞を逸し、後輩が入賞した。そのショックで2日間学校を休んだが、その後は登校し、部活動も続けていた。

しかしその後、減量をやめたのに食べられなくなり、痩せがひどくなって入院した。1ヶ月弱で退院し、再登校している。面接時、将来はミュージカルをやりたいと述べている。性格：頑張り屋。負けず嫌い。内向的。明るい。心理検査：ロ・テスト以外は全て何等問題のない“模範的な”結果となっており、ややでき過ぎの感もある。(HTP, 図3参照)若干自己弁護的な傾向はある(PF)。自己防衛が強く、本音を見せないのであろう。本来、内向的なパーソナリティであるが(ロ・テスト)、現実場面では外交的に振舞っており、副部長としてのリーダーシップも発揮しているわけである(YG:D型)。しかし表面での優等生的な言動と、深層とのギャップは大きい。内面の不安や緊張はかなり強い。欲求も強く、それが満たされない事による不安定さや攻撃性を伴う強い情緒が認められる。内にこもり、いつまでも拘る傾向がある(ロ・テスト)。SCTは全体に常識的で、教訓的な権威主義的な内容が多い。又、「減量し過ぎた。一位になれなくて悔しかった。一位の人が羨ましい。ミュージカルをやっている事を空想する。演劇に進みたい。」等々の記述が見られた。

図 3



〔事例7〕男子、町立中学2年、13歳、卓球部。
主訴：腹痛、頭痛、強迫症状（頻回の排便）、不安。

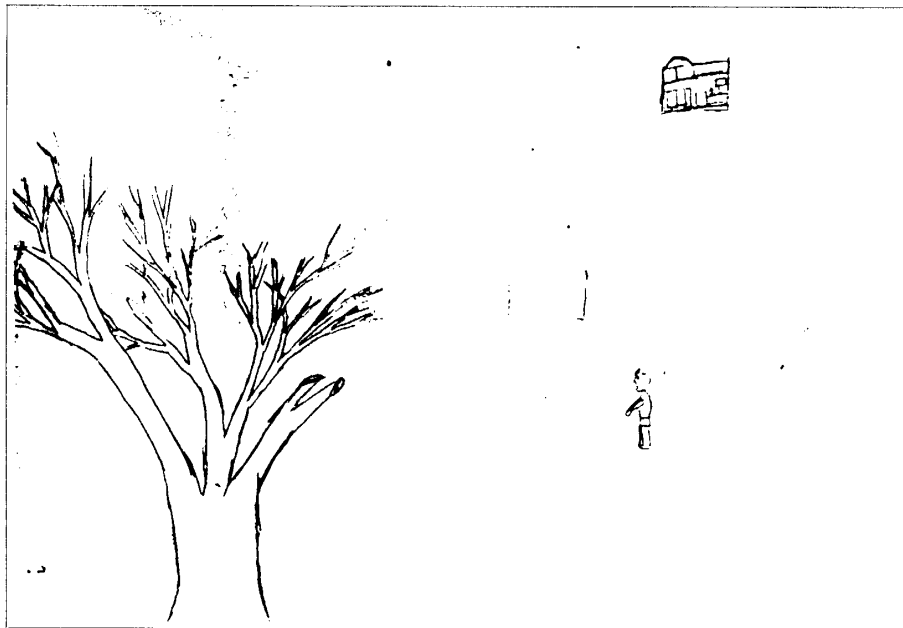
経過：2年がいばり出した1年2学期から部活動がいやになった。2年の6月より体のかゆみのため、部活動を休むようになった。腹痛、頭痛を訴えて、近所の開業医を受診したところ、細菌性血尿を指摘され、非常に怯え、腹痛の訴えも増加した。その後大学病院を受診し、腹痛の頻度は減ったが、2学期より、排便のため頻回トイレに行くという強迫症状が出現し、持続した。3学期のスキー教室に際して、「部活動を休んでいるのにスキーには行くのか」と非難され、悩んでいた。しかし、

参加を決心してから、不安も弱くなり、排便回数も徐々に減って行った。

性格：未熟、小心、依存的、学業不良。

心理検査：テストに非常に緊張、当惑しており、反応は遅く、ハキハキしない。新規場面への適応は不良である。自我が弱く、ちょっとした刺激や、曖昧な状況で混乱してしまう。外界認知の正確さも低下している。内省力にも欠けている（ロ・テスト）。HTPは非常に時間をかけたが、まとまりがなくバラバラで不安定な描画である（図4参照）。樹木画では枝（先端が開放し、折れた枝もある）を丹念に描き、強迫性、統制力の弱さ、外傷体験等を示している。

図 4



〔事例8〕女子、町立中学3年、14歳、テニス部。

主訴：めまい、呼吸困難、四肢のしびれ、脱力。

経過：3年になって部長に選ばれたが、部員がついて来てくれない等、リーダーとしての悩みがあった。7月、団体戦のレギュラー選考のための試合があった。出場できるのではと期待していたが、余り練習もしていなかった別のペアが出る事になった。悔しくて、落

胆した様子を見せたら、「部長なのに」と他の部員に責められた。そう言われた直後「心の置き所がない気持ちだし、気付いたら倒れていた」。息苦しく、手がしびれ、足に力が入らなかった。翌日も同様の症状があり、病院に運ばれたが精神的なものだと言われた。2学期の弁論大会のストレスで再び症状が出た。この頃から毎日の様に「発作」が起き、症状も多彩になり、精神科を受診した。症状は断続的に出現し、休みがちになったが、この様

な状態のまま卒業し、高校に入学した。通院は続け「発作」が出ると休むという形で学校生活を続けている。

性格：真面目、優等生タイプ、依存的で未熟。
心理検査：接触は良いが、表面的な愛想の良さという印象がする。ロ・テストでも常識的な表面的な反応が多い。こじんまりとまとまってしまい、個性が感じられない。能力以上の要求水準があり、これも葛藤の要因となっているのかもしれない。内面に強い情緒、自己主張を持っているが、適切に表現できない。依存的、受動的であり、他者の事を気にしている。愛情欲求に関する不安に対して防衛が困難な事がある。現実を直視せず、逃避的になっている。

考 察

1. 個々の事例に就いて

事例1は身体的疲労による比較的単純な身体症状を呈した例である。「休むのは悪だ」という集団の雰囲気を受診を遅らせ、症状を進ませたと言える。中学時代はいわゆる第二次離乳期であり、心理的に親から離れ、親よりも学校での人間関係に重きを置くようになる。親の注意より、学校集団の中でうまくやって行く事の方が大切になって来るわけである。事例1のような真面目な生徒は教師や上級生に言われると一生懸命それに答えようとする。結果として、自分の体力の限界を越えた過度の練習で、心身共に擦り減らしてしまう。頭痛、過労という身体症状で、警鐘を発していたと言えよう。異常な環境への正常な反応だと考えられる。

事例2、3は部活動でのいじめによる精神的被圧迫が抑鬱、登校拒否として現れた例である。事例2は本来、明るく屈託のない性格であるが、仕返しを恐れて、誰にも言えず、ギリギリまで一人で悩んでいた。遂に耐え切れず、パニック状態になり、母親に打明けた

わけである。本人が幼稚で、余り複雑な自己防衛もできない事が、早目にパニック状態に陥ることになって、返って幸いしたと言えるのではないだろうか。事例3は助けを求めるサインを出していたが、受止めて貰えず、他者不信に陥っていた。又、たまたま知っていた病院が駆込み寺的な機能を果たしたという事になろう。両例共、外向的な性格なので、行動を起こす事ができ、最終的には自己のパニック状態を表明でき、何とか最少限の解決の努力は成されたわけである。

しかし事例4の様に、内向的、未熟で自己主張の力も不十分なパーソナリティの場合、自己の不適応に就いての把握も表現もできず、人格が押し潰されて終うのを、なす術もなく許してしまっている。「学校に行っているのに部活動に出ないで、恥ずかしい。部員とは顔を合せたくない」と思っていた矢先に自分の思惑とは正反対の「見学だけでも」という誘いを受け、混乱したのであろう。はっきり断る事もできず、その場しのぎで切抜けているうちにそれが習慣化してしまい、ぬきさしならぬ状況に追込まれたと言えよう。

事例5はやや年長という事もあり、単純に部活動に否定的になれず、アンビバレントな態度を取っている例である。他の部員に迷惑をかけられないという他者への共感性と、やり始めたからには最後まで頑張らねばという既存の価値観等から、自己の不適応を自罰的に考え、悩んでいた。心身相関を認めず、身体症状だけ直せば解決すると微視的に考えようとしていた。不合理な部活動の在り方に疑問を持ちながらも、それを率直に表明できない集団雰囲気の中で苦しんでいたわけである。

事例6はこれまでの事例と異なり、部活動にのめり込んで、部活動に肯定的な態度を取っている例である。バレーでの挫折を、部活動で補填しようとして果せず、不適応に陥ったものである。バレー、新体操そのものを楽

しむのではなく、大会で入賞する事を目的としている。権威者からの評価がなければ、意味がないわけで、権威主義、勝利至上主義に染まっている。バレーがダメなら新体操、新体操もダメなら、次はミュージカルにしようというわけで、永遠の競争に身をやつして行くのであろうか。

事例7、8は部活動での心理的葛藤が神経症の引金になった例である。事例7は休部を正当化する為の受診の結果から、反って不安が引起こされ、強迫症状が出現した例である。部活動に対する葛藤がある間は症状も持続したが、居直りを決めた時、葛藤も消えて症状も改善された。事例8では、役割上の葛藤からヒステリー症状が出現した。即ち、私的感情を抑圧してでも、部長という公的役割を果たさなければという重圧と、レギュラーになりたいという個人的願望が満たされなかった不満とがないまぜになって、症状を呈し、以後、症状が固定化している。

2. 現在の部活動の問題

本来、部活動は生徒の自発的活動であるわけだが、強制参加の学校も多く、生徒は希望する部がなくても入部せねばならない事が多い。又、勝利至上主義の為、入部や部での役割の選択が本人の意志に反して成される事がある。今回は報告していないが、このような自己決定が阻害される管理主義への不満や、そこから来る不適応も多い。転部や退部の自由のある学校では、これ等の問題が緩和されている。規律が厳しく、管理的なブラスバンド部で不適応に陥っていた生徒が、一旦退部し、その後自分の意志で陸上部に入部し、生き生きと活躍しているという例もある。部活動に、このような融通性を持たせる事は早急に必要だと思われる。

部活動の問題点に就いて今回の事例を通して、ざっと概観して見ると、以下の様になるう。

殆どの事例が、専制的集団雰囲気の中での厳しい上下関係に苦しみ、管理主義的な部活動運営の中で自己決定もできず、言いたい事も言えず、自分を押し殺していた。事例1は過度の練習で過労になった。事例2はいわゆる“精神主義”(根性主義)に毒された上級生にいじめを受けていた。部活動が体罰、いじめの温床である事の一例であろう。事例6は権威主義的で、勝利至上主義に染まり、スポーツ本来の楽しさを忘れてる。

レヴィン⁴⁾は民主的集団が、専制的集団よりも様々な点で優れている事を明らかにしている。専制的集団ではメンバーに敵意、攻撃性、不満が生じたが、民主的集団では友好的な雰囲気の中で意欲や独創性が発揮されたのである。

抑圧された心は発散を求め、先輩に押し付けられた後輩は、自分が先輩になった時、今度はそれを後輩に向ける。又、専制的な先輩をモデルとして見て来た(観察学習して来た)後輩は、それ意外のリーダーシップの取り方がわからず、同じ行動を取ってしまう。この様にして、この悪循環が続いて行く事になるわけである。

ところで心理検査結果でも示唆された様に、多くの事例でパーソナリティの未熟性が認められる。この様に、個人レベルでの問題と、集団レベルの問題(人間関係等)が綾をなし、不適応を織りなしている事を考えると、一面には個人の精神的発達の間からの検討が必要であり、併せて、このような諸問題を引起こしている背景(専制的集団雰囲気、勝利至上主義、いわゆる“精神主義”等)を社会心理学的観点から検討して行く必要がある。

要 約

部活動体験による青年期不適応の事例を通して、部活動体験と人格形成の関連を検討した。専制的集団雰囲気、勝利至上主義、過度

の練習，自発性の阻害等が人格を歪め，不適応をもたらしている。個人の精神発達の面からの検討と，この様な問題を起こしている背景の社会心理学的な検討との両面が必要と考えられる。

おわりに

本研究の要旨は日本教育心理学会第29回総会において発表したものである。

謝 辞

事例収集に際して便宜を頂いた北毛病院桂アグリ先生に感謝を表します。

引用文献

1. 都筑 等, 高田知恵子, 関谷 務: いわゆる部活動の中学生の精神衛生に与える影響, 群大医短紀要, 5: 49-55, 1984.
2. 高田知恵子, 丹野義彦, 高田利武: 青年期の自尊感情と部活動に対する認知との関連, 群大医短紀要, 6: 29-35, 1985.
3. 高田知恵子, 高田利武: 中学時代の部活動体験と青年後期の自尊感情との関連に就いて, 日本教育心理学会第28回総会発表論文集, 378-379, 1986.
4. White, R. & Lipitt, R.: Leader Behavior Reaction in Three "Social Climates" In D. Cartwright & A. Zander (eds.), Group Dynamics. Harper, 1953 (三隅 二不二, 佐々木薫訳編, グループ・ダイナミクスII, 誠信書房)